

水交  
トピックス

# 東日本大震災 災害救助犬出動す

NPO法人 救助犬訓練士協会  
国内渉外担当 山田 道雄  
防災士

## Day 1 (3月11日) 地震発生 ― 出動準備

わが国観測史上最大規模のマグニチュード9・0を記録した「東北地方太平洋沖地震」の発生時、東京・原宿の水交会で会議に参加していた。たぶん築後40年以上で古い耐震基準のままの建物はかなりの時間比較的ゆっくりと大きく揺れた。居合わせた者は皆直ぐ屋外に飛び出したが、付近の高層ビルが左右にゆっくり揺れているのがはっきり視認できる。テレビは震度7、初めて聞く大津波警報を伝えている。会議は始まった直後でかなり重要な案件であったこともあり間もなく再開されたが、議長に事情を話して中座、帰宅する事にした。隣にいた仲間が黙ってペットボトルのお茶を一本渡してくれた。歩いて原宿駅に行く途中の竹下通りはいつもどおり若者で溢れていたが、一種異様な雰囲気漂っている。山手線は全線不通なので線路に沿って新宿駅まで歩くことにした。

15時半ころ、新宿南口に着き、駅ビルの大スクリーンに映るTVで情報収集をしつつ運転再開を待つことにした。スクリーン

の映像は襲来した津波に流される家屋の状況を生々しく伝え、甚大な被害を予測させる。新宿駅で運転再開をしばらく待ったが、湘南新宿ライン、中央線も含め全面運休で再開の可能性は低いと判断、首都高も閉鎖中なので一般道をタクシーで帰る事にした。ところが、タクシーがなかなかつかまらないう。都庁まで行けば何とかなるのではと歩き始めたところ、幸運にも燃料補給のため回送中のタクシーを捕まえ鎌倉まで行けることになった。第三京浜、横浜新道、一国経由で自宅についたのが4時間後の22時半頃。

帰宅すると1時間前に停電は復旧したそうだが、電話はなぜか不通。近くの公衆電話から訓練所の村瀬理事長に連絡すると、警察庁から神奈川県警を通じて災害救助犬の出動要請があり、1チーム3頭4名編成で2チーム派遣することで準備中だが東北道が閉鎖中であり、可能ならば厚木から自衛隊機で現場に進出したいと言う。すぐ自衛艦隊の当直幕僚に電話し、災害救助犬6頭、人員8名、食糧器材等の厚木基地からの輸送便の手配についてお願いをした。それから、かなりの防寒対策をして出動服に着替

え、出動用リュック、手荷物を車に載せて自宅を出発



海自へりで霞目飛行場に着いた救助犬

## Day 2 (3月12日) 現場進出

未明までには参集を完了し、1チーム4名3頭編成の次頁の2チームを編成した。このうち、マニーとアガタは初陣である

チーム	ハンドラー	救助犬		
		名前	写真	犬種(年齢)
山田チーム	村瀬 瀨 理事長	エロス号		ジャーマン・シェパード (7歳)
	村瀬 兄	キュウ号		ラブラドル・レトリバー (8歳)
	村瀬 弟	マニー号		ジャーマン・シェパード (4歳)
玉川チーム	大 島	あかね号		ゴールデン・レトリバー (8歳)
	村 山	ランディ号		ジャーマン・シェパード (8歳)
	田 中	アガタ号		ラブラドル・レトリバー (8歳)

が、他の犬はいずれも出動経験を持つベテラン犬で、国内唯一のINSARAG出動認定犬エロスとあかねは一昨年のインドネシア・パダンの地震にも出動している。

留守部隊に見送られて訓練所を出発、約20分で海上自衛隊厚木航空基地に着いた。犬(ケージ格納)、食糧、器材等を積み込んだところで、海自救助犬チームと合流する。呉造修補給所貯油所の森田1等陸尉

間もなく4歳になるジャーマン・シェパード犬でIRO認定国際救助犬の資格を持っている。

定刻10時、21号機は官民8頭14名の災害救助犬チームを乗せて厚木基地を離陸、内陸部を北上し、1時間半ほどで仙台市郊外の陸自霞目飛行場に着陸した。着陸前に水浸しの仙台空港らしきもの、遠く塩釜方面に白煙が上っているのが見え災害現場到着

(貯油所には陸海空の隊員が所在)をリーダーとする松元事務官・金剛丸号、藤井事務官・妙見丸号、森事務官(ハンドラー)、平井1等海曹(通信)、村川2等海曹(後方支援)の2頭6名の編成。いずれも我々とは顔なじみで、昨年10月高知市の中国四国ブロック緊急消防援助隊合同訓練で「くにさき」乗艦以来の再会である。海自の犬2頭(正式には警備犬)は、いずれも

の臨場感を盛り上げる。霞目飛行場は津波の被害は受けなかったようであり、消防、警察の救援ヘリが頻繁に離発着を繰り返して、ランウエイの向こうにはCH-47ヘリ数機が駐機しているのが見える。

陸自東北方面輸送隊の12トン車に犬、食糧、器材を積み込み、国道4号線を宮城県警車両が先導して南下。信号は停電中でやや渋滞気味だが交通規制はない。道路の両側の畑が冠水し池のように見え、沿線の建物の倒壊はないが屋根がわらが脱落、店舗は営業停止中の様子。しかし、コンビニだけには長い行列が並んでいる。

13時過ぎ、警察学校着。周辺は空き地と新興住宅地で、比較的新しい建物が多い。学校は有事の防災拠点として最近建造されたらしく、地震によるひび割れが見られるが非常用発電機による最少電源と井戸水によるトイレ用水が確保されている。一部のフロアーは住民の避難所となっているほか、警視庁、各県警察応援部隊、海外部隊の一時宿泊所として教職員、学生が後方支援を担当し整齊と運営されていた。

県対策本部(宮城県警)からの指示で「本日の捜索は待機」とされた。犬、器材等を下ろし指定された宿泊室と犬舎の設営を行い、頻繁に余震に見舞われる中夜間の出動に備えて仮眠することにする。

夕刻、唯一の情報源である携帯ラジオが、15時半頃福島第1原発1号機爆発、避難

指示を半径20kmまでに拡大」のニュースを伝えた。

19時頃、同じNPO仲間の日本救助犬協会の川合氏以下8名（救助犬2頭）が合流し、我々と行動を共にすることとなった。22時半頃、宮城県警から翌日の任務付与があり、早朝からの出勤に備えて就寝。学校から布団、毛布を支給されたので暖房はないが寒くはなかった。

### Day 3 (3月13日) 搜索1日目

5時起床し、山田チームと日本救助犬協会チームは岩沼地区へ、玉川チームは亶理地区へ、海自チームは仙台市南、東側地区へそれぞれ分かれて警察車両で移動する。

山田チーム（エロス、キュウ、マニー）は、岩沼署で管区機動隊大隊長からの指示を受け仙台空港の北方、名取川河口南岸付近の名取市閑上地区での生存者・遺体搜索を行うことになった。

現場では自衛隊との協同搜索を命じられたが、施設部隊が重機で搜索通路を確保した後普通科部隊が搜索を行う計画で35普通科連隊（守山）は12時頃到着予定とのことだったが、午前中は名取市消防本部の指揮下に入り、地元消防団と連携して犬1頭に2名の消防団の組み合わせで半壊状態の家屋内の搜索を実施した。海岸線から1・5km地点の閑上大橋付近を行動拠点と

し、そこから海岸に向かうにつれ家屋の損壊状況が激しくなり、1km以内では殆どの家屋が基礎部分を残して津波で流失、頑丈な建物や障害物の所でがれきの状態で堆積している。思わず広島島の原爆投下直後の写真を連想させるほど。一昨年の岩手・宮城内陸地震における土石流の出現現場に較べれば、がれきの隙間はかなりあるので人の臭気を取り易く救助犬の搜索には適している。しかし、そもそも前日までは水に浸っており、残存する建物も中に入っていると、一階部分はほぼ壊滅状態で天井付近まで浸水していた痕跡があり、生体臭気の残存は難しく2階部分でなければ生存者の発見は困難と思われる。犬は結構意欲的に搜索したが生体に対する反応は全く示さなかった。

午後、陸自35普通連の小隊に合流したが、この隊は急遽中隊命令で別の地区に移動する事になったため、消防と一緒に閑上地区の午前中残った部分の搜索を実施することにする。

この間も余震が頻発し、津波警報のため



約30分搜索を中断し、避難せざるを得なかった。

この日、中東のアルジャジーラとカナダのメディアから取材を受けたが、日本のメディアは立ち入り規制をされているのか全く会わない。19時過ぎ警察学校に帰着。

### Day 4 (3月14日) 搜索2日目

警察車両の都合で朝の出発が遅くなり、昨日と同じ現場に入ったのは9時過ぎになった。前日の運河の先の海側地区を消防本部の指示により、消防団数名、警察学校生徒数名との組み合わせで搜索を開始する。前日の場所よりも被害は甚大で、残存家屋は数軒のみで電柱が一様に根元から倒壊し、津波の襲来方向を明確に示している。

午前中、約7メートルの津波襲来との警報が発令され、直ぐ搜索を中断して付近にあった3階建てのビルに退避した。このビルの1階部分は津波で壊滅している。誰かの叫び声が出て海の方を見ると、男女二人連れが海側から運河を越えてのんびりと歩いている。「津波が来るぞ！急いでこのビルに避難せよ！」警察学校の学生が肉声で数回叫ぶとようやく気付いたらしく、こちらに向かつて必死で走り始めた。

この40代夫婦の話によると、地震発生時家には二人の息子がいて大津波警報が出ても楽観していたらしく、20分くらいで津波

が来て逃げ遅れてしまったと言う。息子の一人は1・5 km以上流されて歩道橋付近で何かに掴まり助かったが、一人は未だ行方不明との事。家のあった所まで行ったが、跡形もなく何の手懸りも得られなかったと言う。ふと見ると、父親の手には折れた釣竿が……。おそらく形見代わりに持ってきたのだろう。一瞬の間に家も息子も流された。その事実を冷静に語る夫婦の気丈さに驚いたが、あまりのショックの大きさに自分の置かれている境遇をまだ正しく認識できていないのかもしれない。

退避後約1時間経つても状況に変化がないので、ビルを出て捜索を再開した。午後も運河から海側地区の捜索を実施したが、すでに35普連が実施済みだと判明し途中で捜索を中止する。

警察学校帰着後、以後の行動について宮城県警本部と調整。震災発生後72時間を経過し地震に加え大津波の2重災害を受けた現場の状況からは、今後救助犬による生存者の発見は殆ど期待できなくなる。一方、静岡、山梨、長野等東海・甲信越地方で地震が群発している状況下、藤沢の本部に帰還し新たな災害に備えるべきと判断し、RDTA、海自救助犬部隊の捜索は打ち切りとすることで合意した。

これに伴い海自森田リーダーに輸送便を調整してもらい、明日の午後(時間未定)、霞目飛行場発厚木行のヘリコプター便が設

定されることになった。ニュースは本日11時過ぎ福島第1原発3号機が水素爆発を起したと伝えている。

玉川チームの報告によると、亘理町荒浜地区で海自チームと一緒に捜索中、2階に要介護で不自由な老夫婦を発見、機動隊員と協力しておばあさんを救出。更に津波警報下、動けないおじいさんを森田リーダーがレンジャー仕込みのロープ一本で背負い、機動隊員と協力して屋根伝いに救出したとの事。

また、この日警察学校の宿舎から出動した韓国の救助犬の1頭が右足に裂傷を負い、脳外科医でもある玉川リーダーが応急手術(8針縫合)を行い、韓国チームに感謝された。

#### Day 5-6 (3月15日) 撤収―待機

15日早朝、村瀬理事長以下4名は、川合氏の車両で仙台市宮城スタジアム内のロシア・韓国国際緊急援助隊キャンプを訪問、昨日緊急手術した韓国救助犬を玉川リーダーが再診し、術後の経過良好を確認する。

11時頃海自側から霞目飛行場使用禁止となった旨の情報、続いて12時のニュースによると、福島原発から半径20 kmは避難指示、20 km、30 kmは屋内退避指示が出された。(因みに同飛行場は原発から約100 km)これらの事態を受け民間団体のRDTAとして

は、最悪の場合を考えてレンタカーまたは近隣の知人車両による藤沢までの撤収案を検討する。15時頃海自横須賀地方総監部から19:00霞目発、21:15厚木行で飛行便設定予定(この間一時飛行場オープン)の連絡があったが、結局雨のためこのフライトは中止となった。

翌16日も夕刻に飛行便が設定されたが、これも天候不良のため再び飛行中止となる。

#### Day 7 (3月17日) 帰投

17日も霞目飛行場はわか雪となったが、予定より30分以上遅れて飛来したMH-53E 29号機が雲の切れ目を見て離陸、遠く海上を迂回して15時前厚木基地に無事着陸した。直ちに機内で放射線検査を受けたが人犬ともに異常なし。RDTA、海自チーム総員で厚木基地の畑中航空集団司令官に表敬挨拶をし、ねぎらいの言葉をいただいた。厚木基地では思いがけず基地広報係と地方新聞の取材があり、第11航空隊司令以下海自隊員から暖かい歓迎を受け、軽食の差し入れまでいただいた。

16時半頃留守部隊の出迎えを受け、5日ぶりに村瀬訓練場に無事帰着した。

#### 出動を省みて思うこと

まず、4月7日時点で東日本大震災の死者12,596名、行方不明者14,74

7名を数え、犠牲者の数はこれからも増加するという。亡くなられた方々には心からお悔やみ申し上げるとともに、一日も早知行方不明の方の消息が判明することをお祈りしたい。

今回の我々の出動は、警察庁からの正式な要請に基づくものであり、民間の救助犬団体としては初めてのことでないかと思う。また、救助犬による生存者の発見救出には至らなかったが、初めて公的機関（海上自衛隊）の保有する国際救助犬と一緒に活動したことも画期的なことであった。

阪神・淡路大震災の時と同様、今回も海外から合わせて20数頭もの災害救助犬が救援に駆けつけ注目されたが、災害先進国日本（？）の災害救助犬の出動体制はこれら海外諸国と較べて官民ともに大変お粗末な現状と言わざるを得ない。諸外国はまず、軍若しくは消防あるいはこれに準じる公的機関（例…米国のFEMA連邦緊急事態管理庁）が災害救助犬を保有し、これを民間が支援する体制をとっている。一方、わが国ではわずかに警視庁が約3頭を、海上自衛隊が2頭保有しているに過ぎない。この背景には、災害救助犬の能力、主として次の2点について、行政や救助機関において正しく理解されていないことがある。

その一つは救助犬による搜索効率はいわゆる臭気、鼓動等を感知する距離は数十メー

ター以上であり、人間の何十倍の速度で移動可能である。一定区域の搜索効率はセンサーの掃引幅とその移動速度に比例するので、人力や探知距離の短い人命探査機器に較べて格段の向上が期待できる。もう一つ、救助犬は生存して動けない被災者を感じ発見するのであって、決して遺体搜索を目的として訓練されていないという事。したがって、今回のように被災地域が広範な場合、特に発災後出来るだけ早くできるだけ多くの犬を投入する必要がある、いわゆる72時間以内が一つの目安となる。また、今回のように津波被害により生存者の発見が困難な現場でも限りなく生存者がいないという確認は可能であり、重機投入等の有力な判断材料にはなり得る。

因みに、わが国に「救助犬」と称する犬は民間に約300頭いるが、このうち災害現場に出動してくるのは1割以下でその能力の格差も大きい。これは国内には統一された救助犬の認定基準がなく、犬関係の各団体がそれぞれの基準で認定していることによる。国際的には国連の搜索救助諮問機関（INSRAG）がガイドラインを定め、これに基づき民間では国際救助犬連盟（IR O）が定期的に認定試験を実施している。国内ではこの試験は年3回実施されているが、合格犬は上級（B段階）、中級（A段階）合わせて年間十数頭とかわめて少なく、合格までに最低2年程度を要する。救助犬

が活躍する大規模災害（地震の場合震度6以上）の発生は国内では数年に1回程度であるが、世界的あるいはアジア太平洋地域ではほぼ毎年のように発生している。救助犬の任務遂行可能期間はせいぜい4、



警察学校から撤収する救助犬チーム

5年であり、育成に要する期間と経費を考慮すれば、各国共通の認定基準を適用して国際公共財的な発想で災害救助犬を育成、運用するのが効率的である。

今回一緒に出動した8頭はいずれもIRO認定の国際救助犬であるが、官民共に本格的な質・量の国際救助犬を育成する体制を国の施策として確立する必要がある。同時に現在の国際緊急援助隊の救助犬チームの編成（警視庁の犬3頭）についても、医療チームと同様幅広く官民の能力を活用できるような見直す必要がある。未曾有の被害をもたらした東日本大震災の検証と本格的な対策が近々国として講じられると思うが、国際的に立ち遅れている救助犬の分野においても新たな発想と抜本的な対策を期待したい。（了）（やまだみちお 幹候18期）